

## IIFET2004JAPAN 第12回国際漁業経済会議に参加して

しみず いくたろう  
清水 幾太郎 (調査研究課漁業経済研究室長)

2004年7月・酷暑の東京であった。会議の名は国際漁業経済会議 (International Institute of Fisheries Economics and Trade)。国際レベルの漁業経済に関する研究成果を発表する場である。2年毎に開催され今回で12回目を迎えた。東京海洋大学(品川キャンパス)を会場に7月26-29日に開催された。

国際漁業経済会議は海洋資源の経済問題と貿易問題について、各国専門分野間の情報交換と研究交流を促進するために1982年アラスカで始まった。本会議の事務局はオレゴン州立大学農業資源経済学部にある。1984年ニュージーランド、1986年カナダ、1988年デンマーク、1990年チリ、1992年パリ、1994年台湾、1996年モロッコ、1998年ノルウェー、2000年オレゴン、2002年ニュージーランド、そして2004年東京に至り、国際漁業研究会 (JIFRS) が主催となって開催された。東京開催の主テーマは「責任ある漁業とは何か？」であり、最終日にはパネルディスカッションが開かれ、水産庁の小松漁業資源課長もパネラーの一人として発言された。次回2006年はポーツマス(イギリス)での開催が予定されている。

2004東京大会は日本で初めて開催された大会でもあり、私にとって海外からどのくらいの研究者が集まるのか全く見当がつかなかった。大会初日の開催セレモニーは、新装になった東京海洋大学の懐かしい大講義室で行われた。私の席の前も後も海外からの研究者が目立ち、会場は超満員の状態であった。そんな中に水産総合研究センターや民間研究機関の知り合いがいてホッとした。大会を通じてノーネクタイが慣例とされたのは、首の窮屈な筆者にとってはたいへんありがたかった。真夏の東京という開催時期の所為もあるが、ざっくばらんに議論しようという雰囲気が良かった。

参加者は54カ国、518名で、そのうち196名が

海外から参加されたそうである(写真1)。発表会場で目に付いたのはほとんどが海外からの研究者で、実際は7割方海外からという印象を受けた。筆者の知る日本国内で開催された国際学会の中でも、海外から大勢の研究者が参加した大会の一つではないだろうか。地域別ではアジアから17カ国、ヨーロッパから10カ国、北米から2カ国、中南米から8カ国、アフリカから11カ国、オセアニアから2カ国、南太平洋から3カ国、そして中近東から1カ国の参加があった。筆者が発表した需要と供給のセッションの座長は、唯一中近東から参加したオマーンの大学の先生で髭を蓄えていたのが印象的であった。今大会は東京開催ということもあり東南アジア諸国からの参加が多かったが、開催地によっては参加国も変動し、研究発表で取り上げられる魚種にもバラエティが見られるのである。

研究発表は18のセッションに分かれ、同時に8会場で4日間に渡り行われた。セッションを紹介すると、沿岸漁業の資源管理、資源減少を招く大規模漁業の資源管理、漁業生産物の国際貿易、多獲性漁業と生態系、養殖の経済と資源管理、水産加工流通と消費、需要と供給、理論と実験による生物経済分析、増養殖基盤整備と資源培養、漁業関連活動、海洋医療装飾物質、複合的な資源利用紛争の管理、アジアの漁業と養殖、漁業と養殖の女性問題、漁業と養殖による社会貢献、漁業と養殖の国際協力、水産教育、漁業と生物多様性、と実に漁業に関する全ての問題を網羅していると言っていいほどである。提出論文数は360に上った(写真2)。発表は英語で15分、質疑5分。筆者の演題は Effects of Import and Inventory Amounts on Changes in Wholesale Prices of Salmon in Japan で、日本系サケ



写真1. 写真撮影時に居合わせた研究者たち。

の価格変動に及ぼす輸入量と在庫量の影響を考察した。サケマス類は国際漁業資源ということもあって欧米の研究者の関心は高かった。このほかサケマス類に関してはカナダ、台湾、イギリス、ノルウェーから発表があった。

昼食は学内のレストラン、生協の食堂であるが、決まったメニューはなく、好きなものを選ぶバイキング形式。通常のメニューではなく会議期間中は国際仕様に様変わりした。コックさんも料理の選定に苦労したことであろう。少し遅れて行こうものならたいへん、長蛇の列を覚悟せねばならなかった。昼食をとりながら発表の続きを議論していたり、日常の雑談に花を咲かせたりと、かなり賑やかな昼食風景であった。また自動販売機の飲料水がよく売れていた。かき氷やさんがいたらさぞかしもうかったことと思う。一日の発表が終わって会場を出ると、何となく知っている人が三々五々集まって、さらに議論を深めに品川駅近くの別の“会場”に移動するのが学会の常である。国際会議でも例外ではなかった。そこで盃を交わし、また新たな出会いが生まれ、水産の世界が狭いことを痛感することにもなるのであった。

漁業資源に関する国際会議にはNPAFC、PICES、ICES、GLOBEC等々あるが、いずれも先進国が主導権をとり開催されているものが多い。国際漁業経済会議もかつては先進国からの参加が多かったようである。しかし、近年は開発途上国からもたくさんの方が参加するようになってきた。サケに限らず海からの贈り物である海洋生物資源の、持続的利用方を考えていく責務が現在を生きる私たちにあり、今大会の主テーマ“責任あるサケマス漁業とは何か？”もそこにあったと思う。

今回の国際会議の研究テーマで印象に残った点は、生物経済分析が潮流となって現れてきたことである。経済現象の予測や需給動向の分析を進めていくためには、計量経済学の分析手法を導入せざるを得なくなっている。また物理学の法則まで経済分析に応用され、物理学者が経済分析を行うようになってきた時代である。生物経済分析も資源管理と経済活動の調和を図っていくためには必要不可欠である。海洋の生物生産機構の研究と経営経済研究、自然科学と社会科学が融合する時代が近づいていると感じ威を強くした。



写真2. 要旨集と昨年12月に刊行された論文集のCD。

先にも触れたが開催地によって参加国が異なり、研究テーマや研究対象魚種も異なってくるのが予想される。国際漁業経済会議は魚種を定めず、漁業経済に関する全てを網羅した会議である。したがって、このような総合的な国際会議に参加するに当たっては、自分の研究対象との共通点や相違点、魚種を越えた課題や問題点などを知るメリットがあると思う。一方、NPAFCなどの特定魚種専門の国際会議では、対象魚種に関する研究成果を深く知ることができる。会議に参加する側に会議の性格を活かす姿勢が重要だと感じた。

筆者の研究対象であるサケは国際資源であり、サケを巡って先進国間同士の問題、あるいは先進国と開発途上国との問題が存在する。“責任あるサケマス漁業とは何か？”“責任あるサケマス貿易とは何か？”，また“責任あるサケ養殖とは何か？”“責任あるふ化放流とは何か？”について議論し、未来ある子供たちに対して責任ある資源管理のあり方を見出して行かなければならない。漁業や水産に関係する研究者は国際的にも他の分野に比べれば決して多いとは言えない。必ず国際的に協力し合えると思う。国際漁業経済会議は国際的な資源、環境、経済、社会の問題を包括的に議論する場である。またいつの日か研究成果を議論できる場をもてるように願って、会場を後にしたのであった。